

# 岡崎むかし館

## 柳 行 李

行李とは<sup>ふじつる</sup>藤蓐や竹、<sup>あ</sup>柳などで<sup>あ</sup>編んだ<sup>はこじょう</sup>箱状の<sup>ものい</sup>物入れて、<sup>いるい</sup>衣類の<sup>ほかん</sup>保管や<sup>にもつ</sup>旅の<sup>はこ</sup>荷物を運ぶために使われた  
<sup>しゅうのう</sup>収納・<sup>うんぱん</sup>運搬用の道具です。現在で言えば、<sup>いしやう</sup>衣装ケース、<sup>すーつケース</sup>スーツケースとして使われていました。

その<sup>そざい</sup>素材によって、竹行李、柳行李などと呼ばれます。多くは長方形で深い<sup>ふた</sup>かぶせ蓋になっており、  
<sup>さまさま</sup>様々な大きさのものがああります。特に柳製は、<sup>はだ</sup>肌が<sup>なめ</sup>滑らかで<sup>こうたく</sup>白く<sup>たいきゆうせい</sup>光沢があり<sup>じゅうなんせい</sup>美しく、<sup>ようき</sup>耐久性・<sup>この</sup>柔軟性  
 も備えており、また竹は虫がつくが柳はつかないといわれ、衣類を始め書類などの<sup>ようき</sup>容器として好まれた  
 そうです。広く<sup>ふきゆう</sup>普及したのは江戸時代中ごろで、<sup>たじま</sup>但馬柳として、現在の<sup>ひょうごけん</sup>兵庫県<sup>とよおかし</sup>豊岡市が<sup>とくさんち</sup>特産地でした。

明治から<sup>たいしやう</sup>大正時代にかけて、<sup>きもの</sup>着物から<sup>ようふく</sup>洋服へと<sup>じよじよ</sup>徐々に生活スタイルも変化し、旅の<sup>えんぱんぐ</sup>運搬具もトラン  
 クが国内で作られるようになります。トランクが<sup>こうかく</sup>高額なため、柳行李に<sup>じやうふ</sup>丈夫な布を<sup>は</sup>張って<sup>ほきやう</sup>補強し、ベル  
 トで<sup>こてい</sup>固定・<sup>かぎ</sup>鍵をかけることができるトランク風の行李も作られました。

戦後の<sup>きゆうげき</sup>急激な社会変化により、<sup>ざいりやう</sup>材料の<sup>ちやうせんはんとう</sup>コリヤナギ(朝鮮半島から<sup>いにゆう</sup>移入された、<sup>やなぎ</sup>ヤナギ科の植物)の  
 生育に適した<sup>てき</sup>湿地の<sup>しちち</sup>減少や、<sup>てま</sup>手間のかかる<sup>せいさんさぎやう</sup>生産作業、<sup>せいひん</sup>プラスチック製品の<sup>えいきやう</sup>大量生産などの影  
 響で、<sup>しよくにん</sup>材料も職人も減少し、現在ではほとんど見られなくなりました。

しかし、プラスチック製品よりも柳行李は<sup>つうきせい</sup>通気性に<sup>すぐ</sup>優れているため、<sup>しつど</sup>湿度の高い日本の<sup>ふうど</sup>風土にあった  
 道具として、<sup>あつか</sup>衣装を大切に<sup>えんげきふたいかんけい</sup>扱う演劇舞台関係の人などに、<sup>あいやう</sup>今も愛用されています。



柳行李／岡崎むかし館蔵



(参考)トランク風の行李／岡崎むかし館蔵

### 参考文献

岩井宏美ほか『絵引民具の事典』河出書房新社、2008年

『日本大百科全書』小学館、1986年

宮内慥『箱』(ものと人間の文化史67)法政大学出版、1991年